

森を忘れるな

舞台中央に電話が1つある

その周囲に形の異なる椅子が3脚ある

上手側に家の椅子、下手側にオフィスの椅子、奥側、窓の横に四角い箱がある

・演出メモ

付箋が表紙に増えていくノート・舞台

場転(時間経過)、要検討(寝て起きるとか、窓を開閉するとか、日常の動きで見せるとか)

A「えー、明日がいつ来るのか、っていう話です。明日、って、明るい日、って書いて、明日、ですよ。だから、夜がきて暗くなって、その後朝が来て、明るくなったら、明日、なんですよ。あ、明るくなったら、朝、ってことだと思うんですけど、その、時間的に。ああ、時間といえば、というか、時刻、ですかね、といえば、今の時期だったら、午前五時くらいにはもう明るくなって、明日に、もっと寒い時期になると、六時とか、七時くらいになるんですかね。ああ、その、寒い時期っていうのも、明るくなる時間が短かったりするから気温が下がる、っていうのがあると思うんですけど。いや、風とか、海流とか、他にも要因はあるんでしょうけど、太陽の高さとか。だからその、太陽の高さが季節によって変わるっていうのも、とかまあ太陽の高さが変わるせいで季節があるんだとも思いますが、その、つまり、全部太陽のせいってことだと思うんですよ、はい。で、何が言いたいかって言うと、あ、いや、別にこれを、この話の主張というか、結論として言いたいわけではないんですけど、人間が時間っていうものを創りだしたから、明日、が午前零時とともにやってくる、っていうふうにみんな考えてしまうんだなあ。だって、午前零時って、暗いですよ。明日、が明るくない日と書いて明日、になってる。いや、それに関しては、すごく、いい仕事をなさったと、思っています。例えば、明日遊ぼうね、とか約束して、明日っていつだよ、って、いや、なるか。そっか、明日、が二十四時間になっただけですもんね。でもこの二十四時間が長いのか短いのか、で言ったら、場合によってはけっこう短いのかもしれない。えっと、その、長くても二十四時間待てば、約束した彼は来るかもしれないんですから、ね。はい。えっと、今からするのは、この後、ここに出てくる、彼の話です。彼は何かを待ち続けています。何かを、はい。問題なのは、今挙げた例と違って、彼は誰を、何を待っているのか、よく分からない。その、約束、をしてないんです。だからその、ただの友達かもしれないし、救世主かもしれないし、もしかしたら嫌なものが来るかもしれない。あともう一つ、いつ待っていればいいのか、いつまで待てばいいのか、分からない。なんていうかその、こっちからすれば、待っている必要があるのかすら分からない状況なんですけど、いずれにせよ、彼は、待っています。現在進行形で、どこかで、何かを、いつまでか。ところで、僕のところへは、特に待っていないものが来ました」

B「何が来たの」

A「NHK」

B「ああ、受信料の支払いね。払ったの？」

A「おかしい話なんですよ。だって僕、見てないんですもん、NHK」

B「じゃあ払わなくていいんじゃない」

A「と思うでしょ。僕も言ってやったんですよ、大丈夫です僕NHK見てないんで、って。そしたらやつ、なんて言ったと思います？」

B「やつ、って？」

A「NHK」

B「ああ」

A「で、やつ、言ったんですよ、テレビはお持ちですか、って」

B「あんた、テレビ持ってるの」

A「はい。だから、これはやばい、と思って。だって、受信料ってことは、見てる見てないに関わらず、受信している人に対して払わせられますもんね。」

B「で、どうしたの。なんかどきどきしてきたよ」

A「どきどきしてきましたか。こう言ったんです、今お金無いです！って」

B「それってだめじゃない」

A「でも、こうですよ(真に迫って)今お金無いです！」

B「で、相手はなんて？」

A「(怯えた声で)じゃあお金があるときでいいです。怯えて帰りましたよ」

B「お金払うってことじゃん」

A「そうですか？」

B「そうでしょ、だって、お金があるときにまた来るってことなんでしょ」

A「いやいや、僕にいつお金があるって分かるんですか」

B「.....なるほど！」

A「それ以来、やつ、電話してくるようになりましたよ。お金ありますかー、って」

B「え、なんで電話番号知ってるの」

A「さあ」

固定電話が鳴る

A「あ、NHKだ、逃げろ」

A,B退場

《家》

男でてくる

部屋には段ボール

カレンダー、4月

男「もしもし、森です。ああ、お母さん。うん、元気だよ。NHK？大丈夫、うちセキュリティしっかりしてるから。うん、ちゃんと不動産でNHKの人が入れないとこ選んだからね。え？ああ、なんか、管理人さんがNHKの人は見抜いて入れさせないんだってさ。それってどうなのって思うけどね、まあこのマンションほんとにNHK映らないから違法じゃないよね。ああ、ここNHKは映らないけど有線はいつてるから、暇はしないよ。うん、いつもウクレレのチャンネル聴いてる。いや、なんか、懐かしくなっちゃって。そうそう、ハワイ。え、やだなあ、ハワイって、大学生の頃働いてたウクレレ屋さんの名前だよ。そうそう、店長がアフロの。今思えば、あれ具志堅だったと思うんだけどなあ。え？どの、って、ボクシングの。あ、そっちは変わらない？え、あの頑固じじいが？へえ、溝にハマって、、、1週間！？ふーん、、、(沈黙)え？いや、なんか、突然死んだ、とか聞いても、実感わかないなあと思って。じゃあ、今年はそのスイカ食べられないのかなあ。へえ、息子さんが。ふーん。じゃあ、そろそろ切るね。引っ越してきてまだ部屋の片付け終わってないから。うん、部屋中段ボールだらけ。ああ大丈夫、食べ物は冷蔵庫に入れてるから。分かってるよ、電気もガスもカード払いにしてるから。うん、なんかそうすると、年会費無料になるんだって。え、いや、2年目から年会費かかるようになるらしいからさ。って、この話、部屋借りる時にもしなかったっけ？(笑う)うん、したした。あ、そういえばさ、おじいちゃんの法事っていつだっけ。そろそろじゃない？あ、来年？そっかそっか。おじいちゃんって、喉にアレ詰まらせて死んだんだっけ。えっと、あのー.....そうそう、それ、モチ。あ、そうだった。うん、じゃあ、またね。」

電話を切り、段ボールを舞台側に運ぶ

と、男は会社にいる

《会社》

「運びましたよー。え？でもこれ、縦積み禁止って言われましたけど。ああ、僕のスペースでしたら、あるので。ああ、そうですよね、はい、分かりました」

段ボールを縦に積み、机にかける。荷物と、自分の椅子の端の間を人が一人通れることを確認し、満足そうに頷く。ここで初めて舞台上の空間の端が観客に判る。

デスクに付き、ノートに何かを書いている。  
電話は鳴らない。  
と、書き損じをしたのか、ページを破り、丁寧に折り畳んでゴミ箱に捨てる。

しばらく時間が過ぎ、あくびをして居眠りを始める。

と、固定電話が鳴る。

《家》

「もしもし、森です。ああお母さん。ていうか、なんで携帯にかけてこないの？使い方って、番号が違うだけで電話のかけ方は変わらないでしょ。うん、もう慣れた慣れた。ああ、そうなんだけど、近所に安いスーパーあってさ、まあ、あんまり家でご飯食べないんだけどね。(笑う)うん、週5で飲んでるよ。いや、さすがにこんな時間まではないよ。うん、まあまだ研修とかばっかで大したことしてないけどね。ん？んー、まあ、色々。そういえばお父さんは元気？そっか、もう退職だもんね。うん、分かってる。お盆には帰ろうかな。墓参りもしたいし。.....じゃあ、もう切るねー。うん、おやすみ」

電話を切る

携帯で何かを見て、SNSに投稿しているような

「(笑う)こいつ、やっぱバカだなー。あー、楽しそー」

ノートに日記を書く  
あくびをして、そのまま眠りにつく

《会社》

「(肩を叩かれる)はっ。え？寝てました？まさかー。え、今夜ですか。いいですよ、はい。何かあったんですか。はあ(相手が話したらしく、たまに相槌を打ちながら聞いている)でもそれって...ああ、ですよね。(たまに入ろうとするも、入れない)確かに僕も...ああ、なるほどですねー。(長い)」

開放される

男、ため息をつく

「てか、もう全部喋っちゃってんじゃん.....今夜何喋るんだよー.....今夜何喋るんだよー.....」

《家》

疲れた様子で帰宅する

と、携帯に電話がかかってくる

「お、久しぶりだな。(電話に出る)もしもーし。急にどうしたの。うわ、酔っぱらいかよ。まあ、俺も飲んで帰ってきたとこだけどな。会社の先輩。なんか昼、今夜飲みいこうって誘われてさ、でも、その昼の時点で、話完結しちゃってんの。いや、で、夜びっくりしたんだけど、そこから第二部が始まっちゃって、最終的に、4時間かけて七部完結の超大作。ハリリー・ポッターかよ、って。.....え？いや、ロード・オブ・ザ・リングは三部作だろ。スター・ウォーズはエピソード6で完結だよ！は？マリオは知らん.....あれ、お前今一人じゃないの。なんか、そっちから声聞こえた気がするんだけど、気のせい？え、こっち？やめるよ、一人だって。いや、今遠距離だし、あ？俺は浮気は絶対しないね。うん。ああめんどくさいな。もう切っていい？そうそう、こっちも色々大変なの。彼女か。あれ、やっぱなんか、変な声聞こえるって。あれ.....もしもーし。ああ、繋がった。え、おっさん？ああ、おっさんの声なのね。いや、酔っぱらいはお前もだから。じゃあさっきの声もおっさん？違うって、こっちずっと静かなんだから。で、最近どうなの。いや、俺は働いてるけど、そっちはまだ学生続けてるわけじゃん。どうなのかなーと思って。そっかー。へー、楽しそうじゃん。え？いや、こっちも楽しいことはあるけどさー。まあまだ、そんなに自分の時間取れる時期じゃないっていうか。いやまあ、今後どうなるかもよく分かんないんだけどねー。.....なんか、お前と話すると楽になるわ。ああ、ごめんごめん、嫌味じゃないって。せっかく勉強続けてるんだから、無駄にすんなよ。(笑う)そうだな、なんか、急に老けたかも。じゃあ、もう遅いし、気をつけて帰れよ。じゃ。」

電話を切る

雨が降る

「あ、降ってきた。あっちも雨かなあ」

《会社》

雨の音は機械の音に変わっている

「って、なんか箱の中からすごい音鳴ってるんですけど、これ大丈夫ですか！？え？ああ、これバッテリー駆動なんですね。……あ、いや、正常に起動とかじゃなくて、その、スイッチも押してないのに箱の中で起動しちゃってる時点でもう異常なんじゃないですか！？え？僕が！？……これ、危なくないんですか……はあ、分かりました……」

男、舞台奥の段ボールをおそろおそろ開ける  
ストップし、音が大きくなる

暗転

「もしもし、森です」

明転

「お母さん。ああ、分かる？うん、今日会社で色々あって。なんか機械が暴走して、それ捕まえるので大変だったの。元々は床を自動で動きまわって掃除してくれるロボットらしいんだけど、そうそう、ルンバみたいな。で、そいつがスイッチも入れてないのに箱のなかで動き出しちゃってさ。ひたすら箱のなかを綺麗にしてるの。それじゃかわいそうだから、って先輩がいうから、俺が箱開けることになったんだけど、開けた途端にぽーんって飛び出しちゃって。結局、角のところに追い詰めてルンバみたいに捕まえたんだけどさ。まあ、そんな感じ。え？いや、怪我とかはしてないよ。箱からそいつが飛び出す時に頭打っちゃったんだけど、まあ、痛みもすぐ引いたし。検査？大丈夫だって。それより、そっちはどうなの？変わりない？へえ、商店街の？すごいじゃん。あれって、一等ほんとに入ってたんだ。懐かしいなあ。昔お母さん50回ガラガラ回して、抹茶の飴47個と、洗剤3個に変えてきたことあったよね。覚えてないの？ずっと前、俺が小学生の頃だよ。そうそう、だから次の年から俺が回すようになって。え、何？5月病って、」

カレンダーをめくって机の上に置く。5月。  
通話の相手は友人になっている。

「5月病ってお前、大学の時から一人暮らししてんだから、今更無いって。ん？ああ、別れたよ。えっと、ついこの前。まああっちもあっちの生活あるみたいだしね。あ、でもさ、会社の同期でめちゃくちゃ可愛い子いて、そうそう、エマ・ワトソン似的。え、なんで分かるんだよ。ああ、そっか、俺が可愛いって言う子って、いつもエマ・ワトソン似たもんな。うん、その子と最近いい感じかな。(笑う)まあ、あわよくば？それよりお前はどうかだよ。まだ学生生活続けてんだろ。楽しそうじゃん。え？ツイッターにだだ漏れだから、お前の生活。てかあの写真なんなの？後ろに写ってた女の人、けっこう美人じゃん。プリトニー似でさえ？スピアーズだよ、プリトニー・スピアーズ。え？そっち？いや、写ってたよ。お前の右上の方に、髪が長い、白い服着た女の人。ほら、『最高』って呟いてたの、そういう意味じゃなかったの？え、夜、川に入るのが、最高？あ、そう。おい、何びびってたよ、酔ってて忘れたんじゃないの。いや、本当だって。てかさ、あれ自撮りだから川とか分かんないって。足下写ってなかったじゃん。え？胸まで？そんな深いとこまで行ったのかよ。死ななくてよかったな。おい、どうしたんだよ、こっちは怖くなってくるじゃん。もしかして、心霊写真的なやつ？あーごめんごめん、とにかく、自分で写真見てみろって。あ、俺もちょっとそのツイート見てみるわ。(通話をスピーカーモードに切り替えて、操作する)ほら、俺が言った通り……ん、よく見たら後ろの女の人……あんま綺麗でもないな。わ！びっくりした、急にでかい声出すなよ。(沈黙)ん、どうした？聞こえてる？(沈黙)おーい。(沈黙)おーいって。おかしいな……電波？電波？おどかしてんの？……おい！(沈黙)え……これ、マジなやつ？おい、返事しろよー……えっと、えっと……切るよ？電話切るよ？いいのかな、こういう時どうしたらいいんだ……」

電話を切る

「あ、切っちゃった！」

再び電話をかけるが、相手は出ない。  
電話を切り、座って何か考え始める。

「うん、警察だ」

立ち上がる

《会社》

同僚と立ち話をしている  
カレンダーをめくる  
6月

「いやあ、突然友達が電話切るからさ、あ、俺が電話切ったんだっけ、あ、ちなみにこれ、1ヶ月くらい前の話なんだけど、いや、なんか、ちょっと怖い話になっちゃって、それで友達がしゃべらなくなっちゃってさ、そうそう、電話の向こうで。え？いや、まあ長くなるんだけど、うん、まあなんか心靈写真、みたいな話で、それでそいつがしゃべらなくなって、そうだ、その直前に、え？いや、なんか、そいつがツイッターにあげた写真に、女の人が写ってて、その女、そこにはいなかったんだってさ。で、その一、そうそう、それでその友達、自分でツイートした写真後で見てなかったらしくて、そんなとき、電話してた時に改めて見たら女がいるわけじゃん、すごい叫び声あげてさ、え？どんな、って、うおおおおおおおーって。あ、どんな女の人日、ってことね。髪が長い、地味な感じの、ああ、そうだね、典型的な、ね、え、何が？ああ、幽霊の？リングね、そうそう。あ、そういえばリングリングリングって知ってる？女子プロの話の映画なんだけど、長与千種って本物の女子プロレスラーだった人主演やってて……ああ、ごめんごめん、話逸れちゃったね。えっと……あー、どこまで話したか忘れた。ああ、リングね。俺、それ、見てないわ。秋元康だっけ？え、原作。あ、そっか、秋元康はAKBかあ。(笑う)それよりさ、今週末、空いてる？いや、餃子好きって言ってたじゃん。美味しい店見つけたから、行かない？(長い沈黙)あ、電話？鳴ってるの？ああ、バイブ？うん、いいよ、出て、出て」

ため息をつく

《外》

「終電逃しちゃったよ。たまには歩いて帰るか。」

ぼんやりと歩いている  
雨が降り始める

「ついてないな……あれ、ここどこだ？」

音が大きくなる  
頭を抑え、屈みこむ男

《家》

帰宅し、カレンダーをめくる。7月。  
蟬の鳴き声が聞こえる。  
男は何かをノートに書いている(日記)

と、携帯電話が鳴る。

「もしもし、おお、久しぶりじゃん。どうしたの。ああ、そう。最近どうしてんの、なんかツイートもなくなっちゃったし。え？何ぼそぼそ言ってんの。なんか嫌なことあった？(沈黙)え？だから、はっきりしゃべれよ。(沈黙)あれ、切れちゃった」

ノートに日記を書き終え、ぱらぱらと前のページをめくる。  
何かに気づき、動揺する。

カレンダーを何枚かめくる  
黒く塗りつぶされ、何月か分からない

《会社》

「もしもし、私です、森です。どうも、いつもお世話になっております。はい、先ほど、先日の件でお電話させていただいたんですけど……はい、その件です。またこれからそちらに伺わせていただけないでしょうか……え、はい、本当ですか！では、ご契約を……え、あ、今何と？なんちゃって？なん、ちゃったんですか？あ、いえ、何かございましたか？条件？いえ、条件は以前お話ししたのと全く変わって……ああ、なるほど、分かりました！失礼しまし

た。はい、例のモノ、お付けしておきます。欲しがりなんだからあ.....あ、いえ、調子になんて、乗っておりません、めっそもございませぬよ、はい.....え、例のモノとは何だ、って、それを言うのは野暮ってもんでしょ.....ああ、すみません、はい、言います言います、あの、3年間は商品に故障があった場合無料での修理、もしくはお取り替えを行います.....はい、もちろん、コールセンターは24時間対応でございます。以上です、はい。あの、これよろしいでしょうか.....ええー、そんなこと意地悪言わないでくださいよ.....分かりました、では、更に例のアレ.....あ、もういいですか、では、この条件で.....ああ、もういいっていうのはそっちのことでしたか、すみません、あの、つまり私は、こういうのが好きで.....(笑)ですよね、はい、すみません、あの、商品の方ですが、お試しいうことで1個おまけさせていただきますので.....はい、そうですか、この度は誠にありがとうございます。今後も宜しくお願い致します。はい、はい、失礼しまーす」

電話を切る

「悪い癖だな。(ここで退社。窓を閉め、帰宅)(笑)でも、あのタヌキから契約が取れたぞ」

男、電話をかける

「もしもし、俺。うん、元気だよ。うん、今日は新しい取引先と契約取れた。難しい人でね。うん、ありがとう。お父さんは元気？そう。え？ああ、裏のおじいちゃんね、今年もスイカ...あれ、裏のおじいちゃんって、去年死んだんじゃなかったっけ？うん、そうだよ、モチ喉に詰まらせたかなんかで、あのガンコおやじがぼっくり逝っちゃったねーって、話してたじゃん。お母さん、まだボケないでよ。え、溝？そうだったっけ？あ、モチで死んだのは向かいのおばあちゃんだったっけ。え？うちの？...あ。法事？ああ、今年の夏か。うーん、ちょっと分かんないから、また明日連絡する。うん、じゃあ、また。」

朝、男、鏡を見て、顔を洗う

《会社》

「もしもし、私です、森です。どうも、いつもお世話になっております。先日の件でお電話させていただいたんですけど。はい、その件です。またこれからそちらに伺わせていただけないでしょうか...。え、はい、本当ですか！では、ご契約を.....。え、あ、今何と？馬鹿？私が.....？はあ.....あの、どういった点が.....え、昨日、え、契約を.....？.....は？申し訳ありません、少々お時間いただいて、確認してもよろしいでしょうか.....あ、待って！」

電話が切れる

男、ノートを確認する

呆然とし、首をひねる

「おかしいな、なんで忘れてたんだろう...」

帰宅

《家》

電話がかかってくる

「もしもし、森です。ああ、お母さん、どうしたの。え、ああ、ごめんごめん、忘れてただけだよ。法事ね。えっと.....しまった、え、リンゴ？うん、食べる食べる。ありがとう。じゃあ、またね」

朝、鏡の前で顔を洗う

《会社》

「もしもし、私です、森です。どうも、いつもお世話になっております。先日の件でお電話させていただいたんですけど.....はい、その件です。またこれからそちらに伺わせていただけないでしょうか.....え、はい、本当ですか！では、ご契約を.....え、あ、今何と？はあ、3度め？いえ、先日お伺いした際にお話した.....」

電話が切れる

男、ノートを確認する

釈然としない

自宅

電話がかかってくる

「もしもし、森で.....ああ、お母さん。うん、今電話しようと思ってたところ。リンゴ届いてたよ。ありがとう(と言って部屋に転がっていた段ボール箱を回転させると、Mamazonと書かれている)。今日もお父さんは仕事？.....あんまり無理しないように言っといて。腰悪いんだから.....え、俺？.....えっと、今日は仕事でね...えっと.....え、いや、まあいつもどおりかな、なんか、あんま覚えてないわ.....(笑って)そうかもね、お母さんみたいに.....ごめんごめん、じゃあまたね」

朝

家を出ようとして

「あれ、鍵...鍵は、と...あれ、えっと、ここに...あれ、あれ？おかしいな、と...うわ、もうこんな時間だ！行かなきゃ...あれ、鍵は...えっと...あ、時間！あれ、鍵！ああもう、鍵が無いと家を出られない...ん、いや、鍵がなくても出られるか...あーだから、鍵が無いと、家から出られても帰れないんだな、だからその、家を出ることはできて...あ、時間！」

と、男、家を飛び出す

男、ぼんやりと歩いている

携帯に電話がかかってくる

「もしもし.....え、あ、え?.....えっと、今...え?あ、はい、すみません、すぐ行きます!」

《会社》

会社に着く

「なんだ今日は...ほんとにボケちゃったのかな...ああ、仕事しなきゃ」

ノートを見て、電話をかける

「もしもし、私です。えっと、森です。いつもお世話になって.....」

電話が切れる

男、首をひねる

ノートを確かめ、はっとする

付箋に何かを書き、ノートの表紙に貼り付ける

帰ろうとすると、同僚に声をかけられる

「え、どうしたの。いや、今から帰ろうかなーと思って。どうしたの、何か用?餃子?ああ、えっと、また今度でいいかな。ちょっと、家に帰らないといけなくて。うん、お疲れさま」

帰宅(家に着くまでに、男、道に迷う)

が、鍵がない

「あれ、鍵が無い...おかしいな、朝はあったはずなのに...(ポケットを探して)あー、無いな、くそ、家に入れないじゃないか。あれ、財布もない.....どっかで落としたのか.....ついてないなあ.....ああ、家に帰れない(ドアノブに手をかけると、ドアが開く)あれっ、鍵、かかってない.....」



電話が鳴る

「もしもし.....ああ、お母さん、今帰ったところだよ。え、あ、ほんとだ、もうこんな時間か。うん、ちょっとね.....あれ.....あ、今日ね、残業が長引いちゃって、うん.....うん、大丈夫だよ、今日はもう疲れちゃったから、寝るね.....え、彼女？いないよそんなの.....はいはい、うん、じゃあまたね」

男、何か思いつき、付箋に何かを書いて受話器に貼り付ける

《会社》

男、電話をかける

コール音の間に、ふとノートに目をやる

付箋に書かれた内容が目に入り、相手が出る前に電話を切る

ノートを確認する

何かを付箋に書き、再びノートの表紙に貼り付ける

《会社》

男、会社に着き、ノートを出す

付箋を見る

首をひねる

《病院》

医者との会話

「24です」

「えっと、2015年の、えっと...7月、20日？」

「え.....ああ、病院です」

「桜、猫、電車」

「93.....え、はちじゅう.....よん」

「えー、4、5、3。3、8、8、0」

「え.....犬」

「はさみ、ライター、ティッシュ、定規、ライト」

「ライト.....定規」

「えー、にんじん、トマト、えー、かぼちゃ.....(ぼーっとしている)」

《家》

電話をかける

「もしもし、お母さん？俺だよ。うん、久しぶり。元気だよ。うん、えっと.....なんとなく。会社はねー、最近、失敗続きでさ、うん。(沈黙).....え？あ、いや、何にもないよ。うん、ほんと、暇だったから、電話しただけ。うん、ありがとう。(ぼんやりと相槌を打ちながら、相手の話を聞いている)(沈黙)えっと、じゃあ、またね」

ぼんやりと椅子に座って、ノートを見ている  
携帯に電話がかかってくる

「もしもし。今日はどうしたの。よし、ちょっと待ってな。(ノートのページを開く)お前と話すために、ちゃんとノートに書いてるんだ。忘れちゃうからな。え？え？だから何喋ってるか分かんないんだって。聞いてくれよ、俺さ、今、大変なんだよ。色々さ。えっと、何が大変かって言うとな(ノートを見る)そうだ、最近物忘れがすごくてさ、会社で、同じ取引先に何度も同じこと言っちゃったみたいで、契約取り消されちゃった、んだよ。(笑)嫌になっちゃうよな。なあ、お前は元気なのかよ。え？答えろよ。答えてんの？はっきりしゃべれよ。(沈黙、耳をすます)モリ？なんだよ、モリって。森？森林？森に行った話？アンディ・モリ？なんだっけ、アンディ・モリって.....分かんねえや。あ、そういえばアンディって、俺と苗字同じなんだな。モリ、って。ああ、何、俺のことずっと呼んでんの？(笑)おい、聞こえてるって。ずっと喋ってんじゃん。電波悪いの？(沈黙).....なんかさ、たまに、お前のことがふっと頭に浮かぶんだよ。気持ち悪いとか思うなよ。最近、自分が自分じゃないみたいに感じるんだよ。なんだろうな。今の仕事、向いてないのかな。でも、辞めても、何かしたいことあるわけじゃないし。お前はいいよな、まだ色々選べてさ。あ、嫌味じゃないからな。.....お前に会いたいよ。(沈黙)」

電話を切る

突然、部屋に散らばっている段ボールを壊し、ノートのページを破る

静寂

時が経つ

時折鳴っていた電話も、鳴らなくなる

と、ある日、久しぶりに電話が鳴り、男は電話に出る

「もしもし.....誰ですか.....？はあ.....どちらの.....僕の.....？はあ.....さあ.....あの、よく分からないんです.....はあ.....そうなんですか.....」

電話を切りもせず、立ち上がり、散らばっていた段ボールで鏡(窓)を塞ぎ始める

外に出る

いつの間にか、森に迷いこんでいる

落ちていた財布を拾い上げ、中身を見る

「これは財布だ.....(免許証を出して)森さん.....」

しばらく免許証を眺めている

と、免許証を見ながら、ノートに何か文字と絵を書く

「これで忘れない.....あなたを.....あなたは.....誰.....？」

と、誰かが来たようだ

「あなたは.....？え、私.....？私は.....」

《施設》

静かに、塞いだ窓の前に椅子を置いて腰掛ける

男は少し歳を取っているように見える

付箋に何かを書いては部屋の何処かに貼り付ける作業を繰り返す

その作業もおちついて来た頃、電話がかかってくる

通話する際は、常にノートを見て、時々何かを書き込んでいる

「もしもし、私です。.....ええ、私ですよ。.....オレオレ詐欺？まさか。さっきから私の一人称は、オレ、ではなく、私でしょう。だのにオレオレ詐欺だなんて.....え、ワタシワタシ詐欺？たしかに、それなら今私が提示した問題はクリアしているようですがね、第一、電話をかけてきたのはそちらでしょう。電話をかけられた方が詐欺を働くことがありますか。何故なら、電話をかけてくるのはほとんどの場合が、私の素性を知っている相手ですからね。そんな効率の悪い詐欺があつてたまるもんですか。いや、確かに、その裏をついた、斬新な詐欺かもしれませんね。ええ、しかしあなた、あなたもまた、私に用があつて電話をかけてきたのでしょう。まず、あなたの.....いや、そうは申されましてもね、私は私であつて、それ以外に.....え、名前？名前とは、どの名前を申し上げればよいのでしょうか。人間、1つの名前で生きているわけではありませんからね。.....はあ、親にもらつた名前。なるほど、一般的には、その名前を教えてもらつたと、その、都合が最もよいわけですね。たしかに、本やテレビを見ていると、そのような気もしますが、しかし小説の登場人物に付けられた名前が親に付けられた名前という確証も、物語で語られている場合を除いてはありませんし、ましてテレビに出ている方々の名前など、自分や、事務所の方から付けられたものが多いように感じます。.....ああ、そうですね、はい、私の事でしたね。ただ、非常に申し上げにくいのですが、ああ、申し上げにくい、というのは、複雑な気まずい事情があるから、ではなく、その、あなたが期待している返答を差し上げることができない、ええ、そうなのです、私の場合はおそらく、一般的な、多数派には当てはまらないような状況でして、私の親は、私に名前をつける前に死んでしまったのです。はい、もちろん、両方共、です。.....あー、そんな、いいんですよ。そんなつもりで言ったんじゃないんですから。はい。とりあえず、納得してもらえましたか、私が詐欺師じゃないって。ところで、私も.....え、苦勞なんかしてないですよ。だってずっとここにいて、電話がかかってくるのを待ちさえていればいいんですからね。あなたは電話をかけなければいけないだけ、私なんかよりよっぽど苦勞していると思いますよ。.....全く、あなたは用心深い方ですね。それはそうと、あなたの.....え、泣いてるんですか。大丈夫、あなたはよく頑張ってる。ええ、もう、無理しなくていいですよ。あなたは一人じゃない。.....何言ってるんですか。もう、私たちは友達ですよ。ええ、もちろんいいですよ。辛くなったらいつでもどうぞ。いや、辛くなくても、いつでもどうぞ。私も嬉しいですし。.....本当ですよ。.....おや、今そちらで何か音がしたような。.....ああ、どうぞどうぞ、もちろん、そちらを優先してください。.....え？ああ、すみません、他にも電話があるかもしれないので、ええ、一度切らせていただきますよ。.....いいですって、ほら、早く行きなさいな。.....じゃあ.....あ、すみません、最後にあなたの.....(電話が切れる)ああ！くそっ！」

男、電話を切り、ノートに何かを記録する

電話がかかってくる

「もしもし、私です。ああ、ご無沙汰してましたね。……最近あったこと……。ああ、はいはい、最近あったことですね。ちょっと、待って下さいね」

男、ノートを手に取り、あるページを開く

「えっと、最近あったこと、でしたよね。昨日、昨日のことなんですけど、電話がかかってきたんですよ。……ええ、そうですね、電話がかかってくるのはいつものことなんですけど、昨日、電話で雨の話をしていたんですよ。そしたら、本当に雨が降ってきたんです。これって、もしかして偶然じゃないんじゃないかなあとか思ったりしまして。あの、どう思いますか？……はは、まあ、そうですね」

沈黙

「あの、今日のお話は終わりです」

電話を切る

ノートに書きながら

「(ため息をつく)森さんから電話がかかってくる……やっぱりな、偶然偶然」

電話が鳴る

「はい、私です！……ああ、どうも。……いえ、いつもどおりですよ」

雨の音

また、時が経つ

男、受話器を持ち、喋る

「もしもし、私です。はい、私です。私は、私です。はい。鏡を見ても、自分の顔は写らないですよ。はい。森を忘れるなど、誰かに言われました。はい。必要なことは全部、ノートに書いてありますよ。はい。毎日、電話がかかってくるのを待つことが、私の全てです。はい。ちょっと待って下さいね」

男、ノートのあるページを開く

男      ありがとうございます。はい。それであの、あなたの……え、今日あったことですか。ちょっと待ってくださいね。

男、ノートのあるページを開く

男      えっと、最近あったこと、でしたよね。昨日、昨日のことなんですけど、電話がかかってきたんですよ。……ええ、そうですね、電話がかかってくるのはいつものことなんですけど、昨日、電話で雨の話をしていましたんですよ。そしたら、本当に雨が降ってきたんです。これって、もしかして偶然じゃないんじゃないかなあとか思ったりしまして。あの、どう思いますか？……はは、ああ、すみません、また同じ話をしてしまいましたか。はい。それはそうと、あの、あなたは……え、こちらの天気ですか……

男、ノートから目を離そうとして、やめる

男      じゃなくて、あなたは……いえ、天気……あの……天気は……あの……あの……あなたは！

沈黙

男、何かを言おうとためらっているが、次第に落ち着き、そっと、ノートから目を離す  
窓枠に貼ってある付箋をちらりと見て

男      今日の天気でしたね。〇〇ですよ。……はい、じゃあ、また。

男、電話を切る

雨の音

ノートに何かを書いて、あるページから前のページを破って捨てる

さらに、時が経つ

男はかなり歳を取っているように見える

薄暗い中、光が差し、男の日常

受話器を持ち、喋る

「もしもし、私です。みんな、いなくなってしまうんですよね。ここで会った、はずの人たち、ノートに名前が書い

てあるんですけど、その人と話したことも、書いてあるんですけど、でも、今ここには、誰もいないんですよ。今私に残っているものは、私と、このノート、だけ。」

暗転

「鏡を見ても、姿も見えない。自分の声がどこで響いてるかも分からない。ああ、なんて身体が軽いんだ」

終わり